

## カラオケ天国



「カラオケ」は今や世界語であることは常識で、庶民の日常生活に深く溶け込んだ存在なのだということは、薄々感じてはいたけれど、山北の麓にポツリ居住している私にとってはそんなに身近なものではない。それが今や一騒動なのである。

東京に居た頃も二次会なのでカラオケバーに行くことがあっても、まず達者な人達の歌を聞いていれば済んでいた。音大卒の娘の「ママは音痴だからユメ歌ってはなりません」との宣言を納得していたからでもある。それに大体歌

える歌が歌詞本に載っていない。NHKの歌番組は年一度紅白歌合戦を見るくらいのことだから、新しい歌など自慢ではないが全然知らない。

それでも断りきれない時に「アンダーローリー」とか「サントラルチア」「帰れソレントへ」など歌った記憶があるが、今のカラオケでは見かけないし、僅かな持ち唄の「あざみの歌」「からたち日記」なども近頃は殆どお目にかからない。

私が夜道を歩きながら口ずさむのは、娘時代の「星影やさしく瞬くみ空・・・」とか私の勝手な編曲の「ソルベীগの歌」、三木露風の「ふるさとの「や」なら山」などとても口マンチックなものに限られている。

夫は小学生時代には唱歌は大変得意だったそうだが、「海ゆかば」と「君が代」しか覚えなかったとのこと、今でもレパートリーは限られている。フランク永井と美空ひばりが三四曲という所だが、入来院節ともいえる歌になって

いて、美声と声量で何とか今までそれですつと切り抜けて来た。ところがそれが許されない羽目になってしまった。

いつぞやの便りにも書いた入来に戻つて以来の四夫婦のモエがもう五年も続いている。隔月持ち回りで集まって歓談するのだが、その際五千円ずつ積み立てて旅行に行くことにしている。

しかし年寄りを抱えている人がいて外泊旅行は出来ないで、年に一度、女性だけで阿蘇に出掛けたり、日帰りで人吉や出水の史跡の見学に行ったりして来た。

今年の七月の当番は一番若いS氏宅で、一通りの世間話が終わったところで「カラオケをやりましたよ」という。部屋にカラオケのセットが以前からあったのだが、今までずつと無視されていた。皆すんなりと歌詞本をパラパラし始めてCDがセットされた。驚いたことには、謹直そのものと言ったIさんも、歌には無縁そう

なMさんも、歌い慣れた感じで私の知らない歌を歌いこなしていた。そしてまた奥さん方もよく知っているし結構上手なのである。私は結局小学唱歌や童謡を皆と合唱して終わった。

大体、娘時代に終戦のおかげで与えられた男女同権に触発され、背伸びして男社会に割り込んで来た世代の私には、演歌の男にしなだれがあったような文句には抵抗があった。年のせいか今はそんな意識は消えているが、といって新たに覚えようという気はさらさらなかった。

九月は最年長の我家がモエ当番であった。忘年会や旅行が話題になった。S氏が

「今、テレビに差し込むだけでカラオケが出来る機械が出たそうだよ。」

と言つ。謹直のI氏も

「マイクに歌がセットされているもので四五万円で購入するらしい。」

と詳しい。結局モエの積み立てでそれを買おう

ではないかということになった。持ち回りで皆で楽しもうというのだ。

会計担当の私達に一任されたので私は大手の電気機器店のあちこちに電話で問い合わせた。川内市には無かったが鹿児島市にはあるということだったが、予算より一寸値段が高い。結局T社の電気製品の代理店をやっている長女の婚家から取り寄せてもらって、十月半ばに届いたのだった。

取り敢えず緊急に集まってもらって包みを開いた。男性陣が取り扱い説明書と首っ引きで電池をセットしたりテレビに接続したりとあれこれ一悶着しながらも、ようやく我家のハイビジョンの大型画面に画像が現れた。マイク兼用のリモコンの数字を押して番号を指定すると寸時に歌詞が出て音楽が流れる。マイクの裏側にはめ込まれた1センチ×2センチほどの小さなチップに歌が百曲以上も組み込まれているのだそ

うだ。マイク一本でカラオケが出来るなんて、全く世の中の科学の進歩は目覚ましいと口々に驚嘆した。

そこで十一月の当番I氏宅でのモ工迄に、夫と私に四曲つつマスターせよとのノルマが課せられた。仲間が帰ったあとで歌詞を調べると百曲といっても夫の持ち唄の「悲しい酒」も「おまえに」も載っていない。聞いたことがあるというだけでは画面に流れても歌にならない。

カラオケ教室に通っているというY氏に来て頂いて次々に歌ってもらったが「うまいなあ」と感心するばかりで終わってしまった。我家に毎月第三木曜日、若い人達四五名が集まる三木会がある。働き盛りの人たちの旺盛な食欲を満たした後で、夫がやおら例のセットを取り出した。コードとマイクだけなので小さな布袋に納まっている。

「今やカラオケもこれだけで出来るんだ。今夜

は皆歌ってくれ」

私達はそれを録音しておいて後から練習しようという魂胆なのである。他の仲間とカラオケ会をやっているというN氏が積極的にこちらの希望する何曲かを歌ってくれた。大工のKちゃんもダメダメと言っていたのに結構うまいし声もいい。黙々と聞いていてさも何も知らないと言った顔をしていたOさんが懇請もだしがたしと言った風情でマイクを握った。それがまたびつくりするくらい上手で何よりも情感が溢れている。

しかしこの作戦も私達の歌の練習にはいま一であった。

長女の息子は、今鹿大の農学部二年生で混成合唱のクラブに入っている。夏場使っていた車を預かってほしいとやって来た。良いところへ来たとはかりに夫が

「今歌の練習をしなければならんだ。これ

とこれを歌ってテープに吹き込んで来てくれ」

とこれまた難題を頼みこんだ。私も以前聞いたことのある歌を書き出して頼んだ。

先日その孫が車を取りに来たときにCDを置いて行つた。パソコンで作つたと言っていた。聞いてみると夫に「昂」「見上げてごらん」

「少年時代」「酔歌」など。私には「俺たちの旅」「時の流れに」「つぐない」「なごり雪」が入っている。私が頼んだものではないのもあるが、孫の選んでくれたものなので頑張つて練習しようと思う。あと二週間何とかなければならない。

昼間からカラオケも気が引けるし、夜はニュースを見ているうちに眠くなってしまふ毎日である。しかし努力することの全く苦手な夫にもこのノルマは果してもらおう。

全く平和な山北の冬が始まる。